

「淡路中甲高」採種のながれ



11月 選定母球の定植
(生育・貯蔵状況を観察し、品種の特性を受け継いだ優良なものを母球とします)



交配を防ぐため、
ネット内で栽培します

淡路では、
たまねぎの花を
「ぶち」と呼んで
います。



6月開花・結実
(毛ばたき等で交配させます。)



種子選別
(ふるいにかけ、
ゴミや不良種子を取り除きます)



6~8月 刈り取り・乾燥

「淡路中甲高黄」復活へ

昭和40年代後半までは、県内で「淡路中甲高黄」の優良種子生産のためその基となる原種採種を行っていました。

その後、F1品種の台頭により、淡路中甲高黄の生産も減少していきついには消滅していました。

令和元年、淡路農業技術センターが遺伝資源として大切に種子保存してきた1号及び2号の種子提供を受け、淡路中甲高黄の栽培復活に向けた取り組みを始めています。

「淡路中甲高黄」宇宙へ

2021(令和3)年、「東北復興宇宙ミッション」の一環で記念品の1つとして「淡路中甲高黄」の種子が宇宙ステーションへ。

わずか10g程ですが、地球に無事帰還した後はその種子から採種作業を繰り返し、地域ブランドたまねぎとして育成する予定です。

「東北復興宇宙ミッション」とは

2021年(令和3年)、2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災から10年という節目に、宇宙飛行士が世界中から戴いた支援に対する感謝の気持ちを国際宇宙ステーションから発信しようというプロジェクト。南あわじ市もその活動に参加しています。



淡路島で生まれた たまねぎ伝統品種

淡路中甲高黄



「淡路中甲高黄」誕生

淡路島のたまねぎは、アメリカから導入された種子を大阪の農家が改良し、その種子を淡路に合った品種に改良するため選抜が繰り返されました。

その結果、大正12年(1923)宮本芳太郎氏によって貯蔵性の高い「淡路中甲高」が育成され、淡路島は全国的なたまねぎ産地として発達しました。

第二次世界大戦によって栽培面積は一時激減しますが、戦後に再び栽培が増加するようになり、種子の品種特性のバラツキが問題となってきました。

そのような問題を解決し、統一的に品種改良するため、昭和27年秋頃から旧三原町(現南あわじ市)市の農家斎藤幸一氏と旧三原農業改良普及所(現南淡路農業改良普及センター)西川真二氏が中心となり、農業試験場淡路分場(現淡路農業技術センター)職員の協力のもと、生育や球姿、収量、貯蔵性なども加味した優秀な個体の選抜を始めました。

その後、選抜を繰り返し、昭和30年(1955)頃に収穫時期の異なる3系統が固定され、「淡路中甲高黄1号」「淡路中甲高黄2号」「淡路中甲高黄3号」と名付けられ、本格的に栽培されるようになりました。



昭和29年(1954)の採種ほ場

淡路島たまねぎ 歴史の一コマ

昭和20~30年代には、たまねぎを船便で海外輸出もしていました。



昭和29年夏(1954) 船へ積み込み前の品質検査